

第22号

発行：Dream 五代塾  
吹田市千里山西 5-14-17  
発行責任者：理事長 川口 建

「赤心」継がん

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)

五代の生涯の偉業

「弘成館」鉱山業 (九)

Dream 五代塾顧問

八木孝昌

桂久武宛て書状

五代友厚は鉱山業の「弘成館」を明治六年正月に開設しました。五代はその年の三月二二日に元薩摩藩家老の桂久武に送った書状が残っています(『五代友厚伝記資料』第一巻史料一八三)。そこには鉱山業に臨む五代に意気込みが息づいています。

拙僕当春以来、弘成館と申もの興立、鉱山の事務を開き、関西諸国一手に相円(あひまるめ)候大志を存立(ぞんじ)候。頻に勉勵罷在候。  
・串木野・羽島浦の鉱山は、是非開拓仕度内存に御座候。  
・其外、宮崎県下には多々良鉱御座候趣、御探索奉願候。  
・当時、東京辺、大蔵大輔始、其外頻に鉱山の事を存立、既に御国元両金山も渴望の由、片時も油断不相成。  
・関東は、井上等其外三井・小野・岡田平蔵の社中手下、追々鉱山会社杯興立致候由、幸に関西は未、手遅れ相成居候間、私都(と)て相円候心得にて、四方探索中、式三ヶ所は疾、先鋒を出し置申候。

「今春弘成館という会社を興したが、関西一円の鉱山をまとめて一手に引き受ける大志をもってがんばっている」とは、実に壮大な抱負です。実際五代は「弘成館」を二十以上の鉱山をもつ会社へと発展させました。  
五代についての最初の伝記、『贈正五位勲四等五代友厚君伝』を明治二八年に発表した編者片岡春卿は、五代の鉱山業総体を同書の中で次のように要約しています。

片岡春卿の弘成館事業要約

明治六年癸酉□月、弘成館を創設す(註)。君三十九歳。

君熟(つら)ら惟(おも)く、国家富強の基を立(た)んと企図するには、先づ其財源を求めざる可(べ)からず。夫れ鉱物は天与の恩恵なり。全人未発の財源を地下に求むるに如かず。茲に於て各地に鉱坑を開き、此天与の恩恵を採取するの目的を以て、波江野休衛(薩人、豪直にして胆略あり)・堀孝之(長崎人、謙讓にして慎重なり)・岩瀬公圃(長崎人、寛裕にして質実なり)・永見米吉郎(長崎人、温厚にして和易なり)・久世義之助(美濃人、鄭重にして緻密なり)等の諸氏と議し、数十万の資金を投じ、大に属僚を集め(一時館中役員と称する者二百余名)、以て本館を設立す。実に民間に鉱業を起すは、君を以て嚆矢(かうし)とす。

西郷隆盛、曾て本館の扁額に題して「誠心貫鉄石」と。君吾が意を得たりとし、此語を印章に刻し、館中子弟の俸給指令に捺(お)す。  
(註) 北区堂島において。

明治七年甲戌三月、弘成館出張所を、東京築地入船町八丁目設立し、東弘成館と称す。君四十歳。  
是より大阪を西弘成館と唱へ、東西両

立す。蓋し西館は、波江野・堀向氏理事たり。東館は、岩瀬公圃主任理事たり。

編者(片岡春卿のこと)云ふ。抑(そも)も弘成館の組織たる、館中に在るを内部と称し、総事(理事なり)・正検・出収・調進の四課に分ち、山に在つて現業を執るを外部と唱へ、鉱長(学生之に属す)・出収・鉱石・溶解・調進の六課(五課しかない。営繕課の脱落か)に分ち、(中略)其月俸の如き、一等三百五十円より二十等四円五十銭に至る。其他疾病・死亡・負傷・療養等の帛祭・恩給及び賞罰・旅費の規則に至る迄、秩序整然、故に従事の属員及び各山に在る他の坑夫(手子)て(二)車夫・鍛冶・大工の如き総て幾千万人、君が恵みに頼りて業を営み家を興したるもの幾許(いくばく)なるを知らず。是れ実に一時鉱業世界に雄視(いうし)したる所以(ゆえん)なり。且つ其の各国鉱物所在地の如き、何れも深山幽谷にして人跡稀なるも、一鉱業の興るに従ひ、数千の人員各家族と共に此に衣食するを以て、従前僻陋(へきすう)荒蕪(こう)の地も忽ち小繁華と化し、酒旗翻々時に絃声を聞くに至る。是民を殖(こ)へ(ママ)業を時き致富の実を得るもの、直接間接に邦家を利用す。豈(あに)美業と云はざる可(べ)けんや。

鉱山業総体の評価

「幾千万人、君が恵みに頼りて業を営み」の「幾千万人」はありえない誇張ですが、これを「幾千幾万人」の意であると解すれば、事実に即しています。「民間に鉱業を起すは、君を以て嚆矢(かうし)とす」は言い過ぎで、先行して民間では住友が別子銅山の鉱山業を営んでいました。ただ、弘成館が極めて先駆的な事業であったことは間違いありません。



明治28年『商業資料』第2巻第9号 (富野豪夫蔵)

「弘成館」が詳細な諸規則を備えた「秩序整然」の事業体であったことは驚くばかりです。のちの企業組織のモデルとなりうるものです。数多くの山間僻地に雇用を生み出したことへの言及も、時代が産業社会へ向かおうとする過程にあつて、弘成館が民衆を産業的雇用へと導く大きなうねりとなつたことを示しています。弘成館が、片岡の書くように、「直接間接に邦家(はうか)を利す」役割を担つたことは疑いの余地がありません。

弘成館が五代の思い描いたように順調な利益を挙げえなかつたことは、鉱物資源を産出できなかったことを意味しません。鉱物資源は社会へ送り出したけれども、それによって得られた売上額が、所要経費を大きく上回るものがなかつたというだけです。弘成館は多金の金銀や銅を供給したのですから、その社会的使命は立派に果たしています。

五代友厚を、健全経営の達成者でなければ事業経営者とは認められないというような通念から解き放つ必要があります。「富国の使徒」であることを自己に課した者に金儲け巧者であることを求めるのは、二律背反のようなものです。弘成館が十全の利益を挙げなかつたこと、五代が亡くなったときに百万円の借財が残つたことが相まって、五代を事業的失敗者とする傾向が実業界にあるとすれば、認識を改める必要があります。鉱山業は、五代のように大きな志をもって、パイオニアとして数多くの鉱山を入手するとき、そこに不採算のヤマが出てくるのは致し方のないところでは、評価すべきは、各地の鉱山を開発して、日本近代化のための資源確保に努めたこと、産業社会の形成期に雇用を生み出したことです。

その意味で、『君伝』が最後に「豈(あに)美業と云はざる可(べ)けんや」と述べているのは、まことに適切です。造幣局の開設に関わり、金銀分析所をつくって造幣局の金貨・銀貨

の製造のための地金を造幣局に納入し、それによつて得た利益をつぎ込んで次々と鉱山を入手して、住友に次ぐ大鉱山主となり、そのようにして島津斉彬の「鉱山は国の本なり」の思想を具現化した五代の軌跡は、ダイナミズムそのものです。そこには、一個人が国と社会のために何ができるかの極限の姿が示されています。(次回に続く)

### 芦屋でソプラノ歌手 オルガ・カラスロヴァに 師事した母

Dream 五代塾顧問 曾野豪夫

一九一四年(大正三年)、旧ユーゴスラヴィアの民族主義者ボスニア系セルビア人の一青年ガヴリロ・プリツィプが、サラエボ視察に来ていたオーストリアの民族主義者ボスニア系セルビア人の一青年ガヴリロ・プリツィプが、サラエボ視察に来ていたオーストリアの民族主義者



サラエボの暗殺場面を描いた当時の新聞挿絵 Wikipedia より

リアーハンガリー二重帝国の帝位継承者フランツ・フェルディナント大公を暗殺した事件がやがて第一次世界大戦へと戦線が拡大しました。三年後



セルビアの青年がオーストリアのフェルディナント大公を暗殺のためピストルを発射した位置の footprint に立つ筆者。1963 年。両脇は豊田自動織機の据付け技師。(1998-99 年のコソボ紛争のあとユーゴが分裂し、この footprint はなくなつたか)

一九一七年ロシア革命が起ころりロマノフ王朝が崩壊し、史上初の社会主義国家ソビエト社会主義共和国連邦)が樹立されました。

そして大戦はその翌十八年に終結しました。その結果多くの白系ロシア人がシベリア鉄道を経て日本にたどり着き、その内多くはさらに世界各地に散らばり、一部の人たちは日本に留まりました。多くの人達は無国籍者となったものと思われまます。

その中には大勢の音楽家や芸術家もいました。大戦が終了して九年後の昭和二年(一九一七)に母は大手前高女を卒業してからも同校のピアノの松村順吉先生(今も歌われている同校校歌作曲者)に個人レッスンを受けていました。叔母によると、母は同先生から「自分にはこれ以上教えることはない」と言われて、ロシア亡命將軍の娘 X・コンパニオン夫人を紹介され、神戸北野町山本通りにある同夫人宅でピアノのレッスンを受けることになりました。戦後「異人館通り」と言われている界隈です。同夫人の写真がないのが残念です。

また母はその頃から芦屋では、モナコのモンテ・カルロ歌劇場やミラノの有名なスカラ座歌劇場の往年のプリマ・ドンナでソプラノ歌手オルガ・P・カラスロヴァ夫人に声楽の個人レッスンを受けていました。大阪大丸百貨店の近くの清水教会でもレッスンをが行われ、大阪淀屋橋近くの大



モンテ・カルロ歌劇場 Wikipedia

川町に住んでいた母は(現在の新住友ビル)の東北角の部分、市電でもそこにも通っていました。市営地下鉄梅田心斎橋間が開通したのは数年後私が生れた昭和八年のことでした。(戦争中は防空壕として活用されました)第一次世界大戦勃発の前年、大正二年に設

立された宝塚歌劇団の劇場は、当初から国際的な雰囲気重視し、大戦後多くのロシア人亡命者に職場と演奏会の場を提供しました。声楽ではカラスロヴァなどが有名でした。同夫人は、戦前から戦後にかけて宝塚音楽学校の声楽の先生もして、熱心に後進の指導に当たっていたことでした。

母より七歳年長のテノールのオペラ歌手 中川牧三先生(明治三十五〜平成二十年)は大正九年からカラスロヴァ夫人に歌唱を習っておられました。その唱法は、イタリアの伝統的な歌唱法で、低音から高音まで無理なく美しい声で歌え、アジリタ(声を転がすように歌う技法)による裝飾歌唱を可能にするなど、オペラなど声楽における歌唱表現を支えるもの、だそうです(Mikipedia)による。母も叔母もお嬢様芸としてバル・カント唱法の基礎を習っていた訳です。中川先生と母達は芦屋のカラスロヴァ夫人邸でロシアン・ティーをよばれながら、アルト歌手の柳兼子先生についての話題にも



歌手オルガ・カラスロヴァ戦後歌手 中川牧三先生に送られてきたポートレート

花を咲かせていたことでした。外祖父は、九人いる子供達の芸事は一流の先生につかせるようにしており、特に気の毒なロシア人亡命者には応援の気持ちをもって接していたとのこと。地方銀行家の一族の一人として共産主義はもつての外だつたことでしょう。

中川先生は昭和五年(二十八歳)に恩師、近衛秀麿(指揮者、作曲家、のちN響創始者)と共にヨーロッパ、アメリカに音楽留学のために旅立たれました。秀麿の兄公爵文麿公は大

東亜戦争直前の総理大臣で、日本敗戦後に服毒自殺をされました。灘中学生だった我々は、東条英機元首相のヒストル自殺不成功とのニュースと共に衝撃を受けて聞きました。

五代家と縁のある母永見恵(やす)は、昭和七年四月に父近一(きんいち)と大阪でお見合いをして、五月末に結婚、八月神戸港から日本郵船北野丸でメルボルンに転勤し、更に翌年一月シドニーに移り私が生れました。昭和十六年(一九四一)米英蘭各国と日本の貿易が途絶し(中国を含めて ABCD 包囲陣といわれました)、私たち家族は四月、九年ぶりに伏見丸で神戸御影に帰国しました。



伏見丸の絵葉書

この年九月、大阪朝日会館で「カラスロヴァ・オペラ研究会」の公演会がありました(新聞広告の切抜きちよつと行方不明)、父はシドニーに残留しており生後四ヶ月の赤ん坊を含めて子供四人と舅姑(しゅうと・しゅうとめ)もいたので母は断腸の思いで十年ぶりのカラスロヴァ先生主催の観劇はかなわなかったと思います。

戦争中の昭和十七年、開戦と同時に敵国に抑留されていた父は十ヶ月ぶりに帰国しました。前年から住んでいた御影の洋館は手ぜまなので北野町の空き家を買って家族で下見に行ったことがあります。しかし戦争が終わってからの決めよう、ということになりました。妹も「あそこ角の家だ」と覚えていて、しかし翌年四月父は海軍軍属として南海で戦死し、私共家族の人生は一変してしまいました。弟は幼かったので、我々から話を少し聞いているだけです。

大正時代に多くのロシアからの亡命者は第

一次世界大戦で崩壊した帝政ロシアから苦勞して日本にたどり着き、約二十年後には大東亜戦争と日本の敗戦でまた苦勞をされたのでした。カラスロヴァ先生は、娘がイタリア人と結婚したのでヨーロッパに移住されました。叔母の記憶では、イスラエルに入植されたことですが、研究者の書籍によると敗戦後日本からの出国が難しかったので出国許可をとるため正教(ロシア正教?)からカトリックに改宗してイタリアに移住したとのことでした。

私は父と同じ兼松に就職し、独身時代昭和三十(一九六三)に旧ユーゴスラヴィア(現セルビア)の駐在中に、ミラノに立ち寄ったことがあります。オフシーズンでスカラ座のオペラ公演はありませんでした。また休暇でベオグラードからオリエント急行と国際列車を乗り継いでコート・ダジュール(ニース、モナコ、カンヌなど)に遊び、立派なモンテ・カルロ劇場を参観しました。



ミラノのスカラ座の観客席 (絵葉書 1963 年購入)

母がその三〇余年前に音楽を教わっていたプリマ・ドンナは、どのような歌曲を歌っていたのだろうか、とノスタルジーにひたつたことでした。私は一九六〇年代から八〇年代にかけて中近東・欧州に出張や駐在をしていたので、もしカラスロヴァ先生の滞在先が分れば訪ねることも出来たのに...と惜しいことをしました。

これらのレッスンの話は、母の一歳年下の叔母も、母と一緒にお稽古に通っていたので話してくれたものです。母は戦後間もなく私

が高校を卒業した翌年一月に亡くなったので若い頃の話は何も聞いていませんでした。叔母の話も殆ど聞き流していました。この叔母は九十八歳になっても週一回老人施設に通って、何曲か簡単なピアノ曲を弾きながら、私の母や妹たちと娘時代に一緒に歌っていた「野薔薇」(シューベルト)、「宵待草」(竹久夢二作曲、多忠亮作曲)、「からたちの花」(北原白秋作詞、山田耕筰作曲)などを低い声で勝手に機嫌よく披露していました。

筆写の弟の家族は十年間のニューヨーク駐在期間を除いて阪神間に住んでいます。その次男の結婚式は神戸港を見下ろす北野町の元異人館「サッスン邸」で行われ、その庭園での歓談は爽やかで楽しいものでした。この甥夫妻は現地の友人とニューヨーク・マンハッタンに建築設計事務所を開いて二十余年になります。日本国内の設計業務も引き受けており時々孫をひき連れ一時帰国しています。



筆者の弟の次男夫妻は神戸の元「サッスン邸」で結婚式を挙げた。下は楽器演奏で新郎新婦を寿ぐ新郎の両親夫妻 (2008 年)



芦屋学研究会誌「芦屋の風」創刊号(二〇一四年)に廣瀬忠子先生(芦屋美術博物館館長)は、「母勝代(全国婦人会の副会長)は音楽を通じてイタリア・白系ロシア・ドイツ人の友達が多くなりました。私は度々連絡のため、神戸北野町辺りの異人館へお使いにやらされました」と書いておられました。後日同先生にお目

通っていた娘時代の私の母とお会いしていたかも知れませんが、と話しをしたことでした。百五十年以上も前の幕末から明治時代にかけて多くの幕臣や各藩のエリートが選ばれて欧米を歴訪しました。彼ら彼女らは行く先々で芸事の歓迎も受けたことと思います。楽器独演、室内楽、歌唱、オーケストラ、オペレッタ、オペラ、人形劇、芝居、地方演芸、曲芸... どのように鑑賞し、或いは丁寧にお断りしたのか、時々考えます。

幕臣小栗上野介の一行、長州ファイブの伊藤博文、薩摩藩遣欧使節団の五代友厚や寺島宗則、明治六年の岩倉具視使節団の木戸孝允や大久保利通、随員沢沢栄一(昭和六年、九十一歳で没)などの面々... 明治十六年からの鹿鳴館では日本の楽士が演奏しているので洋楽を一生懸命に勉強し活躍した人々が早くから輩出されていたのでしよう。

主な参考資料:

- ・ 中川牧三・河合隼雄・「一〇一歳の人生をきく」講談社
- ・ 長縄光男・沢田和彦「異郷に生きる 来日ロシア人の足跡」成文社
- ・ 沢田和彦「白系ロシア人と日本文化」成文社
- ・ ポタルコ・ピョートル教授『白系ロシア人とニッポン』成文社
- ・ 曾野豪夫「ゴソボ問題の真相を解析する」大阪綿業倶楽部一九九九年九月号
- ・ 曾野豪夫「写真で語る日豪史 昭和戦前編」六甲出版

(付記) 本号第一項に記載ある「永見米吉郎」は、筆者の母の祖父である。慶応二年長崎から大坂に居を移し、五代に協力した。明治十年、大阪株式取引所初代「肝煎」。

(本紙第8号参照)

# 五代友厚の足跡 ロンドンを訪ねて

7 月末から 8 日間のイギリス旅行。159 年前は五代ら視察団・留学生 19 名が訪れ、欧州文化や近代産業の勉強に励んだ地である。

関西空港からドーハ空港を経由しマンチェスター空港で入国、凡そ 20 時間のフライトである。五代らが訪問した幕末は船と汽車を乗り継ぎ 2 ヶ月を要した。移動手段すら変わってしまい驚異的な技術の進展、驚くのみ。

## UCL 日本留学生記念碑訪問

団体ツアー旅行のため自由時間が無い日程の中、幸いにして最終日前の午後と最終日の午前中にロンドンでの自由時間がとれ、早速ロンドン大学ユニバーシティカレッジ (UCL) を訪問した。大学構内にはジャパンガーデンが設けられ、日本留学生記念碑が建てられている。幕末に英国で



学び、近代日本の基礎を築き UCL で学んだ五代友厚ら薩摩藩士・通訳

19 名と伊藤博文ら長州藩士 5 名の名が日本語と、もう片側にローマ字で刻まれている。サイドには記念碑建立を推進してきたホワイ ト UCL 学長代理の「はるはるとこころづいてはなごかる」の俳句が添えてある。



記念碑は 1993 年 9 月 2 日に建立。除幕式には 200 人余りの関係者集まり盛大に執り行われた。式典には日本から日英友好協会副会長田中京子氏 (本紙第 4 号

参照) 他、会員、留学生藩士の孫やひ孫をはじめ雅楽の演奏グループ、細川首相 (当時) 夫人らが出席された。尚、この企画は式典の 2 年ほど前から進められ、田中京子氏や五代さんのお孫の五代力次氏らが中心に尽力された。(式典に五代力次氏は体調悪く出席叶わず)

UCL は 1865 年の創立で、人種・国籍・性別・宗教など問わず、誰でも学べる大学として創立された経緯がある。留学生たちはこの環境下で自由闊達に勉強に励むことができたと思像できる。この機会を若者たちに与えた五代の判断力、実行力は将来を見通した強い志を改めて感じた次第です。いい刺激を得て帰国することができた。

## 「ザ・ランガム」ホテル

ホテルは UCL から徒歩 30 分位の所に位置する。五代がイギリス視察滞在中の 1865 年末の頃「ザ・ランガム」を利用した。しかし、宿泊費が高く、しばらくして安価なホテルへ変わった。外観は開業時のイラストとほとんど変わりなく大変綺麗なホテルでした。



ロビーのショーケースには、「ホテルは 1865 年の開業で、当時はヨーロッパで最も豪華絢爛なホテルとして大きな注目を集めた 5 つ星ホテル。エドワード 7 世をはじめ、ロンドンに亡命中だったフランス最後の皇帝ナポレオン 3 世や近年ではダイアナ元妃もしばしば滞在したり、テイータイムを楽しんだりするなど、王族に愛されてきた。また、小説「シャーロック・ホームズ」シリーズの作家、アーサー・コナン・ドイルが足繁く通ったことで知られ、仕事の打ち合わせも、ホテル内のラウンジ

(バームコート) で行っていた。」などの、記録・写真などが飾られていた。

なお、ホテルから程近い位置には広大なハイドパーク (1851 年の万博会場) があり、その西に隣接するケンジントン・ガーデンという庭園が広がり、北側のバイズウォーター地区は留学生が使用したアパートが当時あった。今は高級住宅街として非常に環境がいい場所となっている。当時の留学生たちの心境に思いを馳せしばらく散策した。(川口建)

## Dream 五代塾活動状況

### ◆第 16 回 Dream 五代塾セミナー実施

8 月 17 日 (土) 定例のセミナー (五代友厚勉強会) を開催した。(参加者 11 名)

「五代の苦境と富国の使命棚上げ」をテーマとして勉強会開催。欧州での任務は成功裏に終わり、意気揚々と帰国した。即ち、予定された近代工業機械の購入や、パリ万博出展契約とモンブランへの委託、薩摩ベルギー商社契約、欧州視察から得た今後の施策提言など多くの成果を薩摩藩にもたらしたと言える。五代は帰路に次の詩を読んでいる。「あらし瀨にながれかれにし朽木にも 時こそ来ぬれ花咲きにけり」要約すると、「波荒い瀨に流れ

てきた朽木にも、今時がきて花が咲く。あまたの困難を乗り越えて、朽木になりそうながわが国に、いま開花・開国の機運を盛り上げ、必ずや花を咲かせてみせる」。五代の確信を感じさせる詩です。然しながら、帰国後は「薩摩ベルギー商社仮契約」は暗転する。以下紙面の都合で割愛します。ご了承ください。

**編集後記**  
9 月 25 日は五代友厚公のご命日でした。今年も有志を集い阿倍野のお墓にお参りをしました。印刷期間の関係で本誌掲載が間に合いませんでしたので次号掲載とします。

◆第 18 回 Dream 五代塾セミナー予定  
日時: 10 月 19 日 (土) 14 時 ~ 16 時 (500 円)  
場所: 川口宅 勉強内容: 進行 (川口建) 教材: 「開字の祖 五代友厚小伝」 18 話 (著者 八木孝昌・非売品)  
第 7 話「堺事件」一園を背負った奮闘

## Topics

### ■半田銀山シンポジウム開催

主催: 桑折町、桑折町教育委員会  
半田銀山は、佐渡金山・生野銀山とともに日本三大鉱山に数えられ、江戸・明治期に隆盛を極めた銀山です。今年は、明治 7 年に薩摩藩士出身の五代友厚による半田銀山再経営から 150 年の節目となる特別な年にあたり、これを記念し、半田銀山について楽しく学べる「半田銀山シンポジウム」が開催されます。詳細は主催者ホームページをご確認ください。



### ■新書発刊

八木孝昌著 『五代友厚名誉回復の記録』 教科書等記述訂正をめぐって  
本書は、大阪公立大学起業部有志によるクラウドファンディングで 11 月に発刊されます。詳細は Dream 五代塾ホームページでも掲載します。ご支援よろしくお願います。

